

## 『サントスの御作業』と『黄金伝説』・その四

遠 藤 潤 一

### はじめに

#### —付・前回の補足—

本稿は「その三」に引き続き、

- (4) 聖ジャコブ (使徒聖小ヤコブ)
- (5) 聖ジョアン (福音史家聖ヨハネ)

について、福島邦道氏の『サントスの御作業・翻字研究篇』と前田敬作氏ほかの『黄金伝説』との比較について述べる。右の章題は「その一」の「表1」におけるものである。

なお、今回はここで前号「その三」についての補足をさせていただく。補足は「聖アンデレ」の章について三点ほどある。

「その一」 まず、前号における「聖アンデレ」の章の冒頭部の対応の説明に不備があった。(黄)では冒頭で「アンデレ」と

いう名前の語源的説明をした後、段落を改め、「主は、アンデレとほかの数人の弟子たちを三度呼ばれた」とあり、キリストが彼らを呼んだ理由を説明している。それらを要約して示すと、キリストが、

- (1) 彼らに自分の正体を知らせるため
- (2) 彼らと親しくなるため
- (3) 彼らを自分に師事させるため

となる。そして、(サ)には(黄)の右の内容、すなわち「主は、アンデレとほかの数人の弟子たちを三度呼ばれた」との肝心な対応が無い。ただ、右の(1)と(3)が断続的に対応するだけなのである。その対応部を示すと次のとおり。括弧内は(黄)の本文を参照して補った部分である。

- (1) このアポストロはじめは、サンジョアンパウチスタ(洗者ヨハネ)の御弟子なり。ある時サンジョアンともにジョルダ

シの河のほとりをゼズキリストの通り給ふに、サンジョアンこのアポストロに告げたまはく、これこそデウスのコロデイロ小羊、世界の科を助け給ふべき方よとなり。今一人別に居られたる弟子(サンジョアンの弟子)もこれを聞かれ、(アンデレと今二人の弟子は)ゼズキリストの御宿を見知り奉らんとために、御主の御あとに参り、一日の間御教化を聞かんと慕ひ巡られたるなり。その後(アンデレは兄弟の)サンペドロに会はせられ、ゼズキリストに相看させ奉らるべきために誘引し給ふなり。(二九)

この括弧内の筆者波線部が、(サ)の主語が不分明な本文の読みを助けてくれる。筆者波線部の内容は(黄)には無い。(黄)ではその部分が、「主は、アンデレとほかの数人の弟子たちを三度呼ばれた。最初は、彼らにご自分の正体を知らせるために呼ばれたのである」となっているのである。

(3) またある時、(キリストが)ガリレアといふ海ばたを通り給ふに、サンアンデレも、サンペドロも漁人にてましますによつて、網を引かるるを御覧あつてわがあとに来たれ、人を引く漁師となさんと宣ふなり。その時あるほどのことを捨てゼズキリストを慕ひ奉り給へば、十二人のアポストロの内に加へ給ふなり。(二九)

(黄)ではこの部分は、「最後に、主は、彼らが主に師事するようになつた。彼らが漁をしている湖岸を歩いておられたときのこと、——」で始まっている。

(黄)の場合は、アンデレのキリストとの出会いを、このように(1)〜(3)として構成しているわけである。しかし、この(1)〜(3)はもともと別々の話で、(1)は「ヨハネによる福音書」の第一章35〜40に、(3)は「マタイによる福音書」の第四章18〜20にある話である(「マルコによる福音書」第一章にもある)。(サ)のこの辺りの原典はメタフラステスなのかと思われ、(黄)と違う内容の原典に拠っているのかとは思われるものの、このように(黄)と比較してしまつと、どうしても(サ)の本文にはメリハリに欠けているところがあると感じないわけにはいかない。

右の(サ)の筆者波線部「十二人のアポストロの内に加へ給ふなり」は「マタイによる福音書」第四章18〜20には出てこない。『キリシタン研究』第七輯の「バレット写本」の本文(九六頁)に、「使徒アンドレアの祝日」として、「マタイ聖福音書 第四章 18―22」が出てはいるが、それで示してみると、

ゼズス ガリレアの入海の渚を過ぎ給ひ ペドロと名づけらるるシモンとその舎弟アンドレ兄弟二人漁人なるによつて網を下るるを御覧有つて 我が跡を慕ひ来たられよ 人間の漁師と為さんと宣へば 即ち網を棄て御跡を参られけるなり。

となつており、ここまでが18〜20節に該当する内容であり、21節以下は「ゼズスそれより先へ行き過ぎ給ふに今二人の兄弟ゼベデオのジャコベとその舎弟ジョアン——」となる。このように、右の(サ)の「十二人のアポストロの内に加へ給ふなり」

は福音書には無い内容なのである。ところが、(黄)では「こうして、主は、アンデレをお呼びになり、ほかの数人の弟子とともに使徒に召されたのである」とあり、(サ)と対応する。(黄)はもちろん、(サ)も、これは福音書の本文そのものではなく、明らかに聖人伝、それも「聖アンデレ伝」としての筆致によるものなのである。そして、(黄)ではアンデレがキリストの弟子となるというテーマに沿って、内容が整然と構成されている。一方、(サ)ではそれがあいまいで、平板な叙述なのである。この原因は(サ)の原典の問題なのであるか。この原因を、訳者のキリスト教的理解の密度と関連させて考えるのは見当違いであろうか。

〔その二〕前号における「聖アンデレ」の3-2の、

人を殺すことを専らとする者に嫁したる女一人あり、難産して迷惑するによつて、その妹に我等が頼むわれら仏いぢんヂヤナを頼み、祈誓して与へよと言ふが故に、——汝はら悪しき道をもつて嫁し、悪しき心をもつて孕み、天狗に問ふによつて、今の辛勞をこらゆべきこともつともなり。——(三〇)

の筆者傍線部中の「迷惑」について、福島邦道氏より、コメントが欲しかったとの御指摘をいただいた。

福島氏の「迷惑」考—対訳による—(「国語国文五八二号・昭和五年二月」、またそれに対する、大塚光信氏の「対訳寸感」(「国語国文五九〇号・昭和五八年十月」と、「迷惑」(「国語国文六七一号・平成二年

七月は、筆者は読んで知ってはいいたが、前号では言及すること  
を失念していたのであった。ここでは本論の軌道、すなわち(黄)  
を参照して(サ)を読むという軌道にその問題を乗せて言及す  
ることにしたい。

福島氏は右の論において、(黄)の、

ある人殺しの妻が、子供をみごもつていた。彼女は、陣痛がはじまっても、どうしても子供を分娩できなかった。

を、W・カックストンの英訳本、R・ベンツの独訳本の対応部と共に掲げ、

——キリシタン版の「難産して迷惑する」の「迷惑」は、「困る」のように解せられやすいが、訳本を見てもわかるように、子供を産めないでいる状態を言ったもので、「困る」などという生やさしいことでなく、まさに苦痛の極みといつた状態なのである。(傍線筆者)

と述べておられるだけである。つまり、これは(サ)の「迷惑」との対応が(黄)に求められない例なのである。前述の筆者の失念の原因も、今から思うと、こんなところにあつたのではないかと思われるのである。なお、右の筆者傍線部については、その後続部で具体例を指摘して論じておられる。

さて、そこで筆者の所見を述べると、(サ)の「迷惑するによつて」は(黄)には直接的な対応は求められないが、(黄)の後続部を読んでゆくと、

そこで、妹にむかつて、「ディアナ女神さまのところへ行

つて、この苦しみから救ってくださるようお願いしてち  
ようだい」とたのんだ。

とあるのである。つまり、筆者傍線部の「この苦しみ」に注目  
されるのである。そこで、「この苦しみ」を参考にして(黄)の  
前出部を補ってみると、

——どうしても子供を分娩できない(イデ、苦シンデイタ)。  
のように考えることができるのである。(黄)にこのように文脈  
による解釈を加え、改めて(サ)との対応を考えると、(サ)の  
「迷惑」は(黄)の「苦シム(苦シミ)」と対応すると言えるこ  
とになる。そして、この「迷惑」すなわち「苦シミ」という関  
係は、邦訳日葡辞書の「メイワク」とその語釈「苦惱、あるい  
は、心を痛めること。」との関係と矛盾しないと言えることにな  
るわけである。

なお、(黄)の右の傍線部「この苦しみ」の(サ)との対応で  
あるが、(サ)では、

その妹に我等が頼む仏ヂヤナを頼み、祈誓して与へよと  
言ふが故に、

であり、対応が求められない。

しかし、(サ)の前掲部の筆者波線部に、アンデレの言葉とし  
て、

今の辛勞をこらゆべきこともつともなり。  
があるが、それは(黄)では、

あなたがこのような苦しみを受けるのは、当然のむくい

です。

とあり、(サ)の「今の辛勞」は(黄)の「このような苦しみ」  
ときちんと対応するのである。

文脈上、(黄)の「陣痛がはじまっても、どうしても子供を分  
娩できない(状態)」は彼女にとって「苦しみ」であると考える  
ことができる。一方、(サ)では、「難産」は「迷惑」であり、  
「辛勞」でもあり、また、(黄)との対応で言えば「苦しみ」で  
もある、と考えることができそうである。

「その三」もう一つ、3-9の「つがひ」について、用例を  
補足したい。

いかにクルス、謹んで敬ひ奉る、その故はゼスキリスト  
の御身をもつて貴くならせられ、又、その御つがひを金玉  
をもつて飾りたるよりも飾られ給ふなり。(三三)

(主のご聖体によつて清められ、主のおん手足によつて真  
珠のように飾られた聖十字架よ、どうか挨拶を受けてくだ

さい) 1-46

右の(黄)の「主のおん手足によつて」との対応から考える  
と、(サ)の「その御つがひを」は「その御つがひをもつて」の  
誤訳なのではなからうかと筆者は推測した(その一)。そして、  
「御身をもつて」と対の表現がなされている。「御つがひを(もつ  
て)」の「つがひ」の意味について、「関節↓肉体の節々↓手足」  
という意味の推移について憶測した。その「つがひ」の用例を

(サ)から補足したい。これらはいずれも(黄)との対応関係を持たない巻第二の後半部、すなわち、ルイス・デ・グラナダの『信教入門』を原典とする範囲からの例であり、また、「つがひつがひ」と畳語の形で用いられている例である。

(1) 御全体のつがひつがひ離れ離れになり給ふほどなり。

(サンタアナスタジヤのマルチリオのこと・二七五頁)

(2) その責めといふは、人数多とりつきて、全身のつがひつがひ離れ離れになるやうに、したるものなり。(サンクレメンテと御傍輩の、サンアガタンゼロのマルチリオのこと・二七九頁)

これらの語意の中核は「関節」であるが、次の例はどうか。

(3) 汝を胎内に宿し身にかへて、大切に抱き育てたる恩を忘れずは、汝のつがひつがひを御主に対し奉り捧げ奉りて我を喜ばせよ。(サンクレメンテと——二七九頁)

この例は「お前の関節関節を」と言っているのであるが、それは換言すれば「お前の肉体のふしぶしを」ということになるうか。そして、更に「お前の手足を」と解釈するには飛躍があり過ぎるように思われるが、それにしても、単に「お前の関節のすべてを」というだけの意では、なんとなく落ち着かない。

(3)は、(1)・(2)とは文脈の違う用例なのである。長くなつたが、以上で前回の補足を終える。

#### 一 (4) 聖ジャコブ

前置きが長くなつたが、ここで本題に入る。(サ)における本章の表題は、

サントジャコブ メノル アポストロの御作業、並びにそのマルチリオのまがた様体。これエウセビヨ セザリエンセといふ学匠の記録なり。(三九頁)

とある。「メノル」は「小」、つまり「小ジャコブ」である。(黄)の表題も「使徒聖小ジャコブ」(第一巻第六章・二五五頁)である。「エウセビヨ セザリエンセ」とは「エウセビオスの著書の本章もアントニノの『世界史』の「聖人物語」に含まれていたと言われている。それ故、本章の出典はサンアントニノと考えておくことにする。註2

対応関係は、(黄)からみると、冒頭部分を除いて前半部が飛び飛びに大体対応すると言える。挿話の前後関係が逆になつて対応するという部分もある。一方、(サ)で言うところ、全体が飛び飛びに対応すると言える。(黄)との関係を簡単に言うと、(サ)は(黄)の前半部の内容であると言つてよい。

(サ)の冒頭部では「小ジャコブ」と呼ばれる理由について述べている。すなわち、

サントジャコブ メノルはエワンゼリヨに見えたるごと

く、十二人のアポストロ中の御一人なり。メノルと名づけらるることは、今御一人サンジョアン エワンゼリシタの御兄弟にサンチャゴ マヨルと申すにまぎらかざるまじきためとなり。御功德、御善心の劣りたるといふにはあらず、ただサンチャゴ マヨルよりも後にアポストロになり給ふによつて、メノルとは申すぞ。御善心の深くましますによつて、ジュストとも名づけられ給ふなり。サンイエロニモの宣ふごとく、—— (三九頁、冒頭部、傍線部は後出の4

—1項を参照)

とある。つまり、「サンチャゴ マヨル」(聖大ヤコブ)に対して「サントジャコブ メノル」(聖小ヤコブ)と呼ぶのだということである。この部分は(黄)では、冒頭部ではないが、

ヤコブはまた、ゼベダイの子ヤコブと区別するために小ヤコブとも称される。というのは、このヤコブより生まれたのは早かったが、主に召されたのがおそかったからである。そのために、大多数の修道会では、いまでも最初に入会した者を *major* (大) とよぶ習慣がある。あとから入った者は、たとえ年長であるか、聖徳にすぐれていても、*minor* (小) とよばれる。

義人と言われたのは、ヤコブのすぐれた聖徳からくる功德のためである。これについてヒエロニユムスが書いているところによると、—— (第2巻・157頁)

と、大対応する。内容的に多少の異同があるが、主旨は一一致

すると言えよう。しかし、この対応関係は文脈における前後関係を無視してのことである。この後統部に注目すると、(サ)は、エブレヨの中に大善人にてましますによつて、万民より善人達の中よりこのアポストロより外には誰をか御意を人のいただき始むべきやと評判に乗り給ふなり。

とある。これがサンイエロニモからの引用部なのであるが、筆者傍線部は内容が不分明である。一方、(黄)では、

人びとは、ヤコブをとくに尊敬すべき神聖な人とみなし、だれが彼の衣服のへりに手をふれることを許されるかで争つたほどであるという。

とあり、これがヒエロニユムスからの引用の全体である。そして、この(黄)の本文との比較で考えると、まず(サ)の筆者傍線部中の「御意」は翻字の誤りで、正しくは「御衣」なのではないかということに気づくのである。次に、「万民より、善人達の中よりこのアポストロより外には誰をか御衣を人のいだけ始むべきや」と評判に乗り給ふなり」のようにして読むと、二重括弧の中は「善人達の中よりこのアポストロより外には、いったいどんな善人の御衣を人が最初にいだけ(触レサセテイタグク) ことができようか(御衣ヲ最初ニ触レサセテイタグク) コウト思ウホドノ善人ハコノカタ以外ニハイナイ」と読むのだと考えられるのである。「評判に乘る」は「人の口に乘る」という意。「いだけ始む」は「御衣ヲ最初ニ触レサセテイタグク」という意を誤訳したものと思われる。(黄)を参照すると、この

ように読むことができるのである。

以下、対応部の概要を記すと次のようになる(番号は筆者)。

① 「小ジャコブ」と呼ばれる理由(これは(黄)では②の次に出る)。

(サ) サントジャコブ メノルは——(三九頁・冒頭)

② 聖ジャコブがイエスキリストの兄弟といわれた理由二つ(この理由二つの叙述順序は(黄)とは逆)。

(サ) ゼズキリストの御兄弟と呼ばれ給ふに、二つの道理あり。——(三九頁)

③ 聖ジャコブ最初にミサを行う。

(サ) ゼズキリスト御上天の以後——(四〇頁)

④ 聖ジャコブが終生肉体の純潔を保ったこと、また、ヨセプスが伝える話。

(サ) サンイエロニモこのアポストロの御上を——(四〇頁)

⑤ エゼシボの記した話(これは(黄)では②の次に位置する)。

(サ) エゼシボといふ人アポストロの時代より二代目にこの御上を——(四一頁)

⑥ ユダヤ教徒のたくらみと聖ジャコブの死(これは導入部の対応に問題がある)。

(サ) このアポストロ <sup>(4)</sup>イェルサレムにあるジュデヨの

司々より——(四二頁)

⑦ 聖ジャコブの死後のこと。

(サ) ベスパシヤノと、チト イェルサレムを滅ぼされたことは——(四三頁)

(サ) の対応部は以上である。

以下は今までと同様に、(黄)との対応で指摘してよきような(サ)の箇所を拾い出してゆく。

4-1-1 それによつてジュダス ゼズキリストを悪人に売り渡し奉る時、搦め奉るべき武士どもにこのアポストロを取りまぎらかしては如何と存じ、我が面を吸ふべき人を搦めよと合図をしたるとなり。(四〇)

(イエスを捕縛するとき、間違つてヤコブを連行しないようにという配慮からユダが接吻を合図にしたのは、このためであった。) 2-1-5-6

邦訳日葡辞書の「トリマギラカス」の語釈は「物と物との区別がつかないほど混乱させる、あるいは、入りまじらせる」。また、「マギラカス」の語釈は「混同する」。後者の例としての「トリマギラカス」は「甲を乙と取り違える」で、こちらの方がわかりやすい。(サ)の例は、「このアポストロ(ジャコブ)を(ゼズキリストと)取りまぎらかしては——」という意味となろう。「面を吸ふ」は次の例が参考となる。『キリシタン研究』第七

輯のバレット写本翻譯本文中の「われらが主ゼズ・キリシトの御受難」(七三頁より)に次の例がある。

謀叛人のジユダス豫ての約束には我御顔を吸ひ奉るべき  
人体を搦め取て油断なく召し籠められよと云ひ捨て、  
御顔を吸ひ奉るに、—— (七七頁)

右はマタイによる福音書第二六章の翻譯で、当該部はその第四八・四九節である。また、(サ)(黄)はその福音書からの引用である。

4-2 御身無用と思し召さずは、ジユストと名づけられ給ひ、よろづの位に似合ひ給ふサンチャゴを見奉るために、  
イエルサレムへ上りたく存ずるなり。その故は御面相も、  
御進退も、人の御参会も、骨肉同姓の御兄弟にてましますごとく、ゼズキリストに似給ふと人々の申せばなり。  
(四〇)

(お許しがいただければ、イエルサレムへ出かけ、義人と  
言われているヤコブ師にお眼にかかりたいと存じます。と  
申しますのは、師は、顔だちも身のこなしもキリストさま  
とまるで双生の兄弟のように瓜ふたつだこのことだからで  
す。) 2-1156

(サ)の筆者波線部は「御身「無用」と思し召さずは」ということだろう。また、筆者傍線部中の「御進退も」は(黄)の「身のこなしも」と対応する。邦訳日葡の「シンダイ」の語釈は「人

がする良し悪しの行為。または、人が送る良し悪しの生活。//  
また、誰であれ、人の境涯、または、支配権。」で、この(サ)の例は語釈の最初に見える「行為」で、換言すれば「たちいふるまい」、つまり(黄)の「身のこなし」ということになる。次の「御参会も」の「参会」は(黄)とは対応しない。邦訳日葡の「サンクワイ」の語釈は「親密な交際、すなわち親交。// また、人と出会うこと、または、面会すること。」であるが、(サ)のこの例は「人と会って談話すること」、つまり「人との接し方、対話の態度・雰囲気」のような意で用いられているのだろう。また、「骨肉同姓」は卷末の「言葉の和らげ」には無く、「Cot-hin do-õ」(骨肉同胞)がある。この語釈は「Dua natureza」で、「二つの生れつき・二つの天性」の意とすると、(黄)の「双生」の文字面に近いような気がする。邦訳日葡も「骨肉同胞」で(骨肉)の見出し、語釈は「同じ肉・骨から出て、同じ血筋のもの」、また「骨肉の兄弟」は「母を同じくする(同腹の)兄弟」とある。

4-3 ゼズキリスト御上天の以後第一番にイエルサレムにてミサを行ひ給ふはこのアポストロなり。残りのアポストロは御善心に従つて思ひ思ひに行ひ給ふなり。これはソレンニダアデ(莊嚴性)の(ミサのことなるべし。サンペドロはアンチオキヤ、サンマルコスはアレシヤンドリヤにてソレンニダアデのミサを一番にし給ふごとくなり。(四〇)

(また、ヤコブは、使徒たちのうちでミサをとりおこなった最初の人とされている。というのは、ヤコブは、主のご復活後、使徒たちのうちで最初にイェルサレムでミサをおこなうという名誉を、その偉大な聖徳のゆえに使徒たちからあたえられたのである。——これは、ミサ聖祭のことだと考えられる。あるいはまた、ヤコブがミサを最初におこなったと言われるのは、司教服を着て説教をした最初の人であったからでもある。このようにして、聖ペテロ(八四章)ものちにアンテイオケイアで、聖マルコ(五七章)はアレクサンドリアで、それぞれ最初のミサを執行したのである。)

2-158

まず、(サ)の「御上天」と(黄)の「ご復活」とであるが、キリストの「復活」と「昇天」とは別々の事柄ではあるが、一連の切り離せない関係にある事柄である。ここでは特に別々の意義(「昇天」ではなくて「復活」が、というような)が関係しているとも思えない。すなわち、「復活・昇天」という一連のどちらに主眼が置かれているかの違いと考えてよいだろう。(サ)の原典が、たまたま「昇天」を主眼とした記し方だったということではないのかと思われる。

次に(サ)の筆者傍線部であるが、(サ)だけを読むと、訳者の注釈的挿入部のような印象を受けるが、(黄)を見ると、きちんと対応するのである。福島氏の『翻字・研究篇』では「ソレンニダアデ(の)ミサのことなるべし」だが、原文は(翻字で掲

げると、「ソレンニダアデのミサことなるべし」で、「(の)」は「ミサ(の)」とならなければならない。「ソレンニダアデ」(Solennitatis)は福島氏の「原語一覽」では「莊嚴性」とある。この語には「莊重・莊嚴」という意も確かにあるが、この文脈では「儀式・正式」という意味なのではないか(ポルトガル語の辭書に拠る)。つまり、「儀式としての正式のミサ」という意であろうと考えられる。(黄)の「ミサ聖祭」との関係で考えるところようになるだろう。

また、(サ)の「——ミサを一番にし給ふ」は(黄)では「最初のミサを——」であり、食い違いがある。これは、冒頭部の、(サ)の「第一番に——行ひ給ふ」、(黄)の「最初の人」という表現上の違いの延長であると言えよう。

4-4 サンイエロニモ、このアポストロの御上を、ジョビニヤノに対して書き給ふ経に、ビルゼンにてましますとあらはし給ふなり。(四〇)

(ヤコブはまた、終生肉体の純潔を守りつづけた。これは、ヒエロニユムスが『ヨウイニアヌス反駁二書』のなかで証言しているところである。)

2-158

(黄)を見ると、(サ)は「サンイエロニモ、ジョビニヤノに対して書き給ふ経に、このアポストロの御上を、——」のようにあつて欲しいところ。「ジョビニヤノに対して書き給ふ経」とは、(黄)を参照すれば、「ジョビニヤノに向かつて反論した書

〔書物〕の意とならう。「経」としてゐるのだから、「書物」と認識してゐるのだらう。

この後、既出の次の例が入る。

4-5 ジョゼフといふ学匠の書かれたるは、キリストクルスにて死し給ひてよみがへり給ふことを見奉らざらん間は食すべからずとの御誓ひなり。その日は少しも食し給はず、よみがへり給ふ日、このアポストロにまみえ給ひ、サシチャゴともに居たる者に、食を調へよと宣ひ、(↓)その二)

この筆者傍線部は(黄)では「こ復活の日にヤコブがまだなにも食はずにゐると」となつてゐる。

4-6 一度も酒と、セルエジヤ(桜桃)をも飲み給はず、又肉食をもし給はず、髪をもつひにはさみ給はず、慰みとして一度も風呂に入り給はぬなり。(四一)

(ぶどう酒)その他の酒類を飲まず、肉食をせず、頭にかみそりをあてたことも、香油をからだにぬつたこともなく、水浴をせず、) 2-15758

筆者傍線部の「セルエジヤ (cedra)」は福島氏の「原語一覽」では「桜桃」だが、ここでは「桜桃酒」ということか。(サ)の筆者傍線部に注目される。「慰みとして」は(黄)と対応しないが、この「慰みとして風呂に入る」という内容は、(黄)のよう

な「香油をからだにぬる」という習慣を「慰み」によるものとしてとらえた結果、日本の「慰み」の例として、「水浴」ではなく、「風呂に入る」ことを挙げたのではないだらうか。

4-7 ただ御一人(ご一人)テンポロ(神懸)へ入り給ひて、土の上(うづ)に膝を立てて、万民のためにオラシヨし給ふなり。そのオラシヨの繁きによつて、御膝には馬の膝節(ひざばし)のやうなる瘤(こぶ)出で来給ふとなり。(四一)

(ひざまずいて祈ることが多かつたので、両膝の固いことは、足のかかとのようであつた。) 2-1558

(サ)の筆者傍線部「膝を立てて」は「邦訳日葡」の「ヒザ」の例に「ヒザヲ タツル」すなわち「日本の流儀に従つて膝をついて坐る。それは、両の膝と爪先とで身を支えて、踵の上に尻の部分をのせて休めるやり方である。」があり、このこと、つまり、いわゆる「正座」のことかとも考えられるが、同項目中に、「タカヒザヲ タツル」すなわち「ヨーロッパ風に膝をついて坐る。」があり、このヨーロッパ風の姿勢のこと(日本では古来から「高ひざまづき」と言つてゐる姿勢のこと)かとも考えられる。この例の次に「ヒザマツク」があり、「同上」とあるのはどういうことか。キリシタンでは「タカヒザヲ タツル」という姿勢を「ヒザマツク」と言つてゐたものと考えられそうである。「邦訳日葡」の別見出しの「タカヒザ」を見ると、「ヨーロッパ人のように両膝をついて「身を起こして」ゐること。」とあり、「タカ

ヒザヲ タツル」には、「ヨーロッパ人のやり方でひざまずく、すなわち両膝をついている。」とある。(サ)の「膝を立てて」は、この「タカヒザヲ タツル」ことと考えたい。その方が筆者傍線部の「御膝には馬の膝節のやうなる瘤——」の内容と合うと考えられるのである。(黄)では「馬のひざがしらのようなら——」ではなく、「足のかかとのよう——」であるが、このような違いは原典の違いによるものであろうか。なお、(黄)の「ひざまずいて祈る」は「高ひざを立てて祈る」ことであろうと考えている。

ところで、ヤコブの殉教の場面の導入部は(サ)と(黄)との間に大きな違いがある。(サ)は、ヤコブがイエルサレムのジユデオの司から、キリストに対してどう思うかとの問いを受け、ヤコブは「まことの御約束の御助け手」と答えた。また、人々の中にはヤコブの言葉を信ずる人もいれば、信じない人もいた。信ずる人々の中には侍たちも多かったので、フアリゼヨラ(反キリスト教のパリサイ人たちは、ヤコブに対する対策を講じないわけにはいかなくなる。

一方、(黄)では、本文で示すと次のようになる。ヤコブの殉教については次のようにして始まるのである(割注は省略する)。

ところが、ヤコブが司教になって三十年たったころ、パウロが告発を受けて、これを皇帝に上訴したためにローマへ護送されることになり、ユダヤ教徒たちは、パウロを殺

す機会を失った。そこで、怒りの鋒先をヤコブにむけて、殺す名目をさがした。 2-159

筆者傍線部、目的がはっきりと示されている。右の内容は(サ)とは対応しない。この続きは次のとおり。

『教会史』が使徒たちの同時代人であったヘゲシッポスの言葉として伝えているところによると、ユダヤ教徒たちは、ヤコブのところへやってきて、こう言った。「あなたにお願いがあるので、キリストを神の子だと思ひこんでいる人びとをその妄想から改宗させてください。みんなが集まる過越の祭りの日に立ちあがって、キリスト崇拜をやめるように言ってください。あなたのおっしゃることなら、みんな聞き入れるにちがいありません。そうすれば、わたしたちも、みんなといっしょになって、あなたが義人で、だれにたいしても差別なく義しくふるまわれる人だと証言いたしましょう」

この内容を見ると、ユダヤ教徒たちはヤコブを反キリスト者の集団に誘い込もうとしているわけである。そして、このあたりから(サ)には対応が見られるのである。しかし、(サ)には右の(黄)の冒頭の筆者傍線部の内容、すなわち『教会史』におけるヘゲシッポスの言葉からの引用ということわり書きは無い。筆者の前述の説明文中、「信ずる人々の中には侍たちも多かったので、フアリゼヨラは、ヤコブに対する対策を——」という内容から対応が始まるのである。本文を掲げよう。

4—8 その人々の中に侍達も数多あるによつて、フアリゼヨ等見咎めて自今以後は了簡に及ぶべからず、万民ゼスキリストをまことのキリストなりと信ずべきものなりと嘆き、一所に集り評定をなして、サンチャゴのもとに参りて申さく。御覽せらるることく、この在所の万民迷ひを抱けり。御異見をもつて直し給へと頼み奉るなり。

それによつてパスコア（過越祭・復活祭）の日、ゼズスに対して何とやうに信ずべきぞとの実否を正し、教へ聞かせ給へ、万民御身の善を用ゆるが故に、各々従ひ奉るべし。然れば法事に参り集るジユデオも、ゼンチヨも宜ふべきことを聞かんために、テンポロ（神懸の高き所）へのほり給へと申せば、（四二）

これが（サ）の対応本文であるが、（黄）を参照すると問題となる点がいくつかある。まず、筆者波線部「サンチャゴ」は誤りではないのか。「サンチャゴ」は「大ヤコブ」、本章の「ヤコブ」は「小ヤコブ」、共に「ヤコブ」であることから、勘違いが生じたものかとも考えられるのだが、また、次のような問題がある。それは、筆者傍線部「それによつてパスコアの日、——」の改行の意図が不明確であるという点である。末尾部の筆者傍線部「申せば」は、この改行からの内容には主体が表れない。これは、前段落中の「フアリゼヨ等」を主体としなければ意が通じない。つまり、（黄）を参照すると、この改行はフアリゼヨ等のヤコブに対する言葉の半ばでおこなわれていると言えるこ

とになる（前掲の（黄）の筆者傍線部参照）。このような不自然さ、そして、前述の「サンチャゴ」の件から考えると、（サ）の改行以下とその前とは文脈が違うのか、換言すると、（サ）の改行の前には省略があるのか、そして、その省略された部分には（黄）と対応する部分が含まれていたのか、などと考えざるをえなくなる。

ところで、（サ）の内容を見ると、キリストを信じていることを「妄想」と言つたり、キリスト崇拜をやめるように人々に言つてくれ、という（黄）のような内容は見られないことにまた注目せざるをえないが、この点などは訳者の配慮によるものかとも考えられる。この（サ）の続きと、それに対する（黄）の対応部は次のようになる。

アポストロも高き所へ上り給へば、ジユデオ等（ちかうしぎ）、いかに御身に（おんみ）に従ふべき人々にかのクルスにかかり給ふゼズキリストに対して分別することについて迷ふが故にその信心（しん）の実否をあらはし給へと申すなり。（四二）

（それから、ヤコブを神殿の屋根にあがらせて、こう呼びかけた。「ああ、人間のなかで最高の義人よ、あなたの言葉にはだれもしたがわずにはおれません。ごらん下さい。人びとは、邪道に走り、十字架にかけられたイエスをあがめています。ですから、あなたがイエスをどう考えておられるか、それをわたしたちに聞かせてください。」） 2—160

（サ）の「人々に」の「に」は誤訳であろう。末尾部の筆者傍

線部は(黄)と一致するが(黄)の筆者波線部は(サ)ではどうか。(黄)の「人びとは、邪道に走り、」の波線部の主語が「イエス(は)」ではなく、「人びとは」であれば、(サ)の「人々——」迷ふ」という主・述の關係と合うと言えようか。

アポストロも高声に答へて宣はく、ゼズキリストの深き御ことわりは人の言語に述べられず、その故は凡人のごとく女人の子にたまはしますのみにあらず、その御右に住し給ふはかりまします御親のスタタンシヤ(実体、本体と御同前にてましますなり。この以後一切の人をただし給はんためにくもに乗じて天降り給ふべしと宣へば、その数多の人々この)御返答と、御証拠を聞いてデウスを尊み始め奉りて申さく、ダビドの御子我を助け給へと。(四二)

(ヤコブは、大声で答えた。「あなたがたは、人の子にいてななが知りたいのですか。よろしいか、人の子は、天国にあつて力あるおかたの右にすわつておられます。そして、そこから生きている人間たちと死者たちとを裁くために来臨されるでしょう」キリスト教徒たちは、これを聞いて小おどりしてよろこび、説教をありがたく聞いた。) 2

160

(サ)には誤りがある。筆者傍線部「その御右に住し給ふ」は少なくともこの文脈では「その御左に——」でなければならぬ。これは、「キリストは神の右に座している」ということと「キリストは神の実体と同質である」ということをいっしょに述べ

ようとしたために生じた誤りであろう。(黄)では前者についてのみ述べられている。また、(サ)の筆者波線部「くもに乗じて」は(黄)には無いが、(黄)の筆者波線部についての「注(一〇)」を見ると、そこに「しかし、わたしは言っておく。あなたがたは、まもなく人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗つてくるのを見るであろう」(『マタ』二六の六四、そのほか『ペテ』三の二二)、とあるのである。つまり、(サ)は訳者の文飾によるとは考えられなくなる。原典にこのようであつたのだから。そうすると、「4-8」で指摘してきた(サ)と(黄)との違いは、根底に原典の違いという問題があるかと考えねばならないことになろう。なお、福島氏の翻字本文では右のとおり「くも」で、漢字を当てていない。それはそうと、「雲に乗じて」というと、日本神話か仏教の世界のイメージを浮かべてしまうのは、筆者だけではあるまい。(黄)は日本語訳文だけではなく、綿密な注が非常に役に立つのである。

フアリゼヨスこれを見て互に大きに後悔し、ゼズキリストに対してかくのごとく言はれよとの調へは誰人の言ひなしぞや? 近頃不覚なり、今は別にせんかたもなし、坐せられたる所より突き落さんよりほかの道なし。然れば万民それに恐れてその言葉をも慕ふべからずとて、あ善人といふ人も迷はれたりとて、悪人等の上にあがり、突き落し奉り、つぶてをもつて打ち殺せと下知を加ふるなり。(四

二)

(パリサイ人と律法学者たちは、こう語りあつた。「このようにイエスをたたえる証言をさせたのは、ひどい失敗だつた。あそこへあがつていって、あの男を突き落とそう。そうすれば、民衆は、おじけづいて、彼の言葉を信じなくなるだろう」そう言つて、大きな声で、「これはしたり、義人でも間違ひをおかすのか」と叫びたてた。それから、屋根にのぼつて、ヤコブを突き落とす。さらに石を投げつけて、「かかれ、義人ヤコブを石打ちにせよ」と叫んだ。)

—160

この後、ヤコブは「大きな杖」で打たれて殉教をとげるのである(右の(サ)の「悪人等の上に」の「の」はローマ字本文には無い)。(黄)では「布を晒すときに使う槌」で打たれたとある。そして、殉教の場面の締めくくりとして、「ヘゲシッポスはこのように書いてある。」とある。(黄)では殉教場面の導入部・結末部で、ヘゲシッポスからの引用ということとわつてゐるのだが、(サ)ではこれにはまったく触れていない。

4-9 ベスパシヤノと、チト イエルサレムを滅ぼされたことはこのアポストロを殺し奉りたる故なりとジユデヨも、各々心得たるものなり。ジユデヨのイストリヤを書かれたるジヨゼフといふ学匠もイエルサレムの破壊の体を書いて、これ皆ゼズキリストの御親類、善人と呼ばれ給ふジヤコブを殺し奉りたる報いとして、ジユデヨの中にかくの

ごときの災難起これりと書かれたり。(四三)

(ヨセパスによると、イエルサレムの破壊とユダヤ人の離散は、ヤコブを殺害した罪が原因で起こつたことだといふ。)

2-161

まず(黄)の注(八)によると「ヨセパス」は「ユダヤ人の歴史家(三七—一〇〇以後)」で、「ユダヤ戦史」と「ユダヤ古事記」が主著」ということである(膨大な解説があるが割愛)。(サ)の「ジユデヨのイストリヤを書かれたるジヨゼフといふ学匠」とはこの「ヨセパス」のことであろう。また、(サ)の筆者波線部「——ジユデヨも、各々心得たるものなり」は、この「ジヨゼフ」について述べるための布石のようにも思われる。

次に(サ)の「ベスパシヤノ」と「チト」は、(黄)の本章の後半部、すなわち、ヤコブ殉教についてのユダヤ教徒に対する報復、イエルサレムの破壊について語られる部分(それらは(サ)では省略される)であるが、そこで次のように登場する。

ところが、ユダヤ教徒たちは、こうした忠告を受けても改宗せず、しるしを見ても怖れを感じなかつたので、主は、四十年がすぎたころ、ウエスパシアヌスとティトウスをイエルサレムへ送られた。ふたりは、町を根こそぎ破壊した。

2-162

そして、これも(黄)の注(二三)によると、「ウエスパシアヌス」は「六六年ネロ帝の信頼あつた將軍としてユダヤ人の反乱鎮定に派遣された」將軍で、後に皇帝となつた人。「ティトウ

ス」は彼の長子で、「イエルサレムを攻略して戦争を終結」させ、「父の死後帝位に」ついた人、ということになる詳細は省略。「ヨセフス」の注(八)その他にもこの両人が登場する。つまり、(サ)の「バスパシヤノ」と「チト」とはこの二人のことである。

4-10 然のみならずイエルサレムの滅亡は別してゼズキリストを殺し奉りたる御罰、また御恩を弁へざる科故なり。

それを指し給ひてゼズキリシト、石は石の上に残るべからず、その故は我がビジタサン(巡察)の時節を見知らざればなりと宣ふなり。(四三)

(しかし、原因は、これひとつだけではない。イエルサレムが破壊されたほんとうの理由は、なによりもまず、ユダヤ教徒たちが主を十字架にかけたことにある。主が以前におんみずからこう言っておられたのは、そのなにより証拠である。「城内のひとつの石もほかの石のうえに残しておかない日が来るであろう。それは、おまえが神のおとずれのときを知らないでいたからである」(ルカ一九の四四。)

2-161

(サ)の筆者傍線部は訳出未熟例として既出(↓「その一」)筆者波線部「それを指し給ひてゼズキリシト、——と宣ふなり」という言い回しは(黄)の筆者波線部と一致すると認めておいてよいだろう。

4-11 さりながらゼズキリシトは悪人の死することを望み給はず、ただ善に引きかへて生きんことを望み給ふが故に、その後悔を起こさせられんために、三十年このアポストロをその所に置き給ひて、その後悔を四十年の間待ち給ふなり。このアポストロのカノニコス(宗旨に合っている)といふ經に加へらるるエピストラ(書簡)を書き給ふものなり。いつまでもデウス尊まれ給へ。(四三)

(しかし、神は、罪をおかした者たちを殺すことをのぞまず、また、ユダヤ教徒たちを容赦してやるうとのお考えもなかつたので、四十年のあいだ彼らが罪のつぐないをするのを待たれ、使徒たち、とくにユダヤ人たちにたえず説教をしていたヤコブをつうじて罪のつぐないをうながされた。けれども、うながしや諫言だけではユダヤ教徒たちを改宗させることができないので、怖ろしいしるしによつて彼らをおどろかせようとされた。) 2-161

(サ)の「三十年このアポストロをその所に置き給ひて」は意味不明だが、これは(黄)の「——ユダヤ人たちにたえず説教をしていたヤコブをつうじて」という内容となんらかの関連があるのか。(サ)は、四十年の間後悔するのを待った、——として本章「ジャコブ伝」を締めくくる。一方、(黄)は、四十年の間待ったが後悔しなかつたので、神は「怖ろしいしるし」によつて彼らを驚かせようとした、——という形で物語が進展してゆく。(黄)の後続部では「しるし」の例が挙げられ、それで

も彼らが後悔の色を示さなかつたので、ウエスバシアヌス、テイトウスの派遣ということになるわけである、「419」参照。このようにして、(黄)の歴史物語は続く。(サ)では、ヤコブ死後の歴史物語は省略されたのである。

なお、(サ)の末尾の筆者波線部は本章の補足として記されたものであるが、(黄)のどこを見てもこれと合致する内容の箇所は見出されない。主旨は「ジャコブは正典に掲載されている手紙を書いた」ということで、これは(黄)の本章冒頭の「ヤコブ」についての注(一)で、「カトリック教会が支持する伝統的なヤコブ像」を解説する中で、「ヤコブの手紙」の筆者とされている(現在では否定説が多い。)とあるが、このことを述べようとしたものであろう。「アポストロの」の「の」は誤訳か。

## 二 (5) 聖ジョアン

(サ)における本章の表題は、

サンジョアン エワンゼリシタの御作業、これラオナシヤといふ在所のミレトと申すビスポの記録なり。(四四頁)

とある。「エワンゼリシタ」とは「福音史家」ということだから、「福音史家聖ジョアンの御作業」ということになる。(黄)の表題も「福音史家聖ヨハネ」(第一巻第九章一三四頁である。なお、「ミレト」については後述する。

本章は冒頭部・末尾部を除けば、あとは(黄)と対応すると

言える。話順の違いも見られない。内容上の小異が見られるだけである。

(サ)の冒頭部、すなわち本章の導入部は聖ジョアン(聖ヨハネ)が「ゼズスの御寵愛の弟子」であったことをまず述べる。

続いて、デウスがこのゼズスの寵愛の弟子に慈悲をかけたといふことの説明として、ゼズスがジョアンを、

- (1) 内々御昵近とし給ふこと
- (2) 外の大臣ともなし給ふなり
- (3) テゾレイロになし給ふこと

を挙げている。この(3)の理由としては、「その故は天下無双の至宝にたまはず貴きビルゼン サンタマリヤを御パシヨンの御時わたし給ふなり」を挙げている。「テゾレイロ」は福島氏の「原語一覽」では「会計係」で、それはそれでよいのだが、この本文の文脈からすると原義的な「宝物管理人(ラテン語では *thesaurarius*)」という訳がふさわしいであろう。「至宝サンタマリヤ」を預かることになったのであるから。

(サ)ではこの次に、「ベダの曰く」として、ゼズスがジョアンを寵愛した理由として、ジョアンがビルゼンであったことを挙げている。

一方、(黄)であるが、その本章は例によって「ヨハネ」という名の解釈から始まり、「ヨハネ」という名前のこの四つの解釈のなかに、彼がもっていた神からの四つの特別な贈物をみとめることができる」と述べ、その贈物の説明として、

(1) 神が聖ヨハネにたいしてもつておられた特別な愛である。——

(2) 彼の肉体の清純さである。——

(3) 神秘の啓示である。——

(4) 神が彼におん母をゆだねられたことである。神から贈物を受けた人とよばれるのは、そのためである。というのは、主が聖母を彼の保護にゆだねられたのは、主が彼におあたえになることのできた最大の贈物だったからである。

と述べている。この(1)は(サ)の(1)に、(4)は(サ)の(3)に主旨としては対応しているが、あとはどうであろうか。(2)は(サ)の「ペダの曰く、——」に対応するとも言えるが——。箇条書きで述べている共通点もあるが、そうかといって(サ)の原典が(黄)のこの内容とまったく同じであったとは考え難い。

実は、(黄)ではこの次に、

彼の生涯を記述したのは、ラオデイゲイア(小アジアのアリユギア地方の古代都市)の司教ミレトスであった。そして、イシドルス(七〇ページ注三)がその著『諸聖人の出自と生涯と死』のなかでそれを集約している。(二三五頁)

とあるのである。この「ミレトス」は(サ)の表題中の「これラオヂシャといふ在所のミレトと申すヒスポの記録なり」の「ミレト」である。(黄)の右の前半部は(サ)の表題中のこの内容と対応するのである。(黄)ではここからヨハネの物語に入るが、そうすると、その物語はミレトスの記録(イシドルスの著書に拠る)

ということになる。そして、この部分から、(サ)との本格的な対応が始まるのである。

ところで、(サ)の本章はバレット写本にもある。福島邦道氏の『続キリシタン資料と国語研究』(笠間書院・昭和五八年)の第一章はバレット写本の「サンジョアン伝」であるが、それに拠ると、その表題は、日本語訳されているものを掲げると、

〈サン・ジョアン・アポストロ(使徒) エワンゼリシタの御業、同じく著書シメオン・メタフラステスの短縮したもの  
の抜書〉

とあり、ミレト(ミレトス)ではなく、メタフラステスが登場する。この点について、福島氏は「その著書を、版本では原作者のミレトをあげ、写本では短縮したメタフラステスをあげている」と言及される。「短縮した」とは「抄訳した」というほどの意と解釈したい。一方、勉強社版『サントスの御作業』のチースリク氏の解説(二二頁)に拠ると、リポマニの「聖人伝大系」にはメタフラステスなどのギリシア文献を初めてラテン語に訳したものがあるといふことであるから、実際の原典はリポマニかとも考えられる。しかし、そうだからと言って、(サ)と(写本)とで内容に違いがあるわけではないのである。(サ)と(写本)を比較した限りでは、両本の対応する範囲の内容・文体は同一と言える。問題はむしろこの辺にあると言える。そうすると、(サ)も(写本)も同一の原典に拠りながら、(サ)の場合は原著者と伝えられるミレトを、(写本)の場合は抄訳者のメ

タフラステスを、それぞれ挙げておられるだけの違いと考えられな  
いであろうか。福島氏もこのように考えて、前掲の言及をなさ  
ったのではないか。そして、(サ)より(写本)の方が先に成立  
したものとするれば、(サ)では(写本)のこの標題の部分で、原  
著者を掲げるという形に訂正したのではないかと考えられる  
のである。以下、必要に応じて(写本)に言及することにした  
い。

さて、(サ)と(黄)との対応であるが、(サ)では、

サンイエロニモ宣ふごとく、御上天の以後このアポスト  
ロ・ビルゼン・サタンタマリヤの死し給ふまで御そばを離  
れ給はぬとなり。その後アジアといふ国へ御弘めのために、  
至り給ふなり。それによつて(そこにおいて)数多の人を  
キリシタンになし、数多のエケレジャを建て給ふなり。然  
るところにドミシアノといふその時代の悪主人このアポス  
トロの御誉れを聞いて、ローマへ召しのぼせ奉り、ラチナ  
といふ門のほとりにて湧かしたる油の中へ入れ奉るなり。

(四五)

とある。(黄)では、

使徒であり福音史家であつたヨハネは、主の愛弟子であ  
り、選ばれて童貞の肉体をもつていた。聖十二使徒が聖靈  
降臨のあと世界じゅうに散らばつていったとき、ヨハネは、  
アジア(五四ページ注三)に行き、その地に多くの教会を建て  
た。皇帝ドミティアヌスは、それを聞くと、彼を捕えさせ、

ラティナ門とよばれているローマの門外で煮えたぎつた油  
をみたした桶に投げこむように命じた。 1-135

となる。さて、(サ)の筆者傍線部の内容は(黄)とは一致しな  
い。(サ)には「サンイエロニモ(聖ヒエロニユムス)」が登場  
する。そして、それはここが初出なのであるが、原典でもそう  
であつたのか、または原典にはこれ以前にヒエロニユムスから  
の引用があつたのか。ヒエロニユムスを基にする伝記もアント  
ニノの書から引用されているということであるから、(サ)・(写  
本)の本章の原典はサンアントニノかとも考えられるのである。

(サ)の「その後アジアといふ国へ——」以下が(黄)の「聖  
十二使徒が聖靈降臨のあと世界じゅうに散らばつていったと  
き、ヨハネは、アジアに——」以下と対応することになる。そ  
こで、この部分に注目してみると、(サ)の「その後」は「サン  
タマリヤの死後」と読み取れるのであるが、原典では果たして  
そうであつたのかという疑問が生ずる。(黄)では「聖靈降臨の  
あと」であるが、(サ)の原典でもそうであつたのではなからう  
か。(サ)の訳者の抄訳によつて、「その後」が右のように読み  
取れる結果となつたのではなからうか。なぜならば、ヨハネが  
小アジアへの伝道をおこなつたのは個人的な理由(マリヤの死か  
らではなく、十二使徒の各地への伝道という大義名分の中で考  
えられる事柄なのであるから。しかし、福島氏の前掲書のパレ  
ト写本の翻字本文と比較すると、右の筆者の疑問とした箇所は、  
(写本)でも同じである。筆者の考える省略の問題についての手

掛かりは(写本)からはつかめない。なお、(サ)の筆者波線部「それによつて(そこにおいて)」は、括弧内が巻末正誤表で訂正された部分であるが、(写本)では「そこにおいて」であり、訂正された部分は(写本)と一致するということになる。これは偶然の一致なのか、または(写本)に拠つて訂正したのか、興味深いところである。

さて、(サ)の続きは次のようになる。

しかれども貴きアポストロ骨肉の腐ることなきがごとく、少しのつづがもなくその器物の中より出で給ふものなり。ドミシアノそれほどに歎くといへども、サンジョアンは御談議をも止め給はぬことを見て、パトモスといふ島へ流し奉るなり。その所にただ一人ましまして御主のあらはし給ふアポカリプセのレベラサンを書き給ふなり。(四五)

(しかし、聖ヨハネは、肉の汚れを知らずにこの世の道を歩いてきたとおなじように、火傷ひとつしないで桶から出てきた。皇帝は、ヨハネがなおも説教をやめようとしないうのを見て、こんどはパトモスという遠海の島へ流刑にした。彼は、その島にまったくひとりで住み、ここで『ヨハネの黙示録』を書いた。) 1-135

まず、最初の筆者波線部の対応が面白い。(サ)だけを読むと、この部分は不分明なのであるが、次に、筆者波線部は(黄)には対応が求められない。終わりの筆者波線部は福島氏の「原語一覽」によると、「アポカリプセ」は「黙示録」、「レベラサン」

は「啓示、黙示」である。「啓示による黙示録」ということになる。そして、その「啓示」とは「御主のあらはし給ふ」ということであろう。つまり、「神から示されて、神の御旨として書いた黙示録」ということになるのであろう。

このようにしてジョアンの物語は始まるのである。対応部の概要は次のようになる(番号は筆者)。

① ヨハネ、小アジアに伝道。ローマ皇帝ドミティアヌスの迫害を受ける。

(サ) その後アジアといふ国へ御弘めのために——(前掲部)

② ドミティアヌスの死後、小アジアにもどる。エペソス市で、女弟子ドウルシアネをよみがえさせる。

(サ) その年ドミシアノ殺害せられたるによつて——(四五頁)

③ 異教の哲学者クラトンを入信させる。

(サ) 或る時クラタンといふヒイロゾホ教多の人を広き所に集め、——(四六頁)

④ 信仰心の揺らいだ二人の弟子をいましめる。

(サ) 或る時かの二人我が暇を取らせたる下人等よき衣裳を着て通るを見て、——(四六頁)

⑤ ヨハネ、各地を伝道。偽神の大祭司アリストデムスを入信させる。

(サ) アポストロ御談議をもつてエヘソを始めとして、——

— (四七頁)

⑥ エウセビオスの『教会史』にある逸話。

(サ) サンクレメンテ パパ エケレジヤのイストリヤに見えたるごとく、—— (四九頁)

⑦ ヨハネと山うずらの話。

(サ) 或る人雉を生きながら進じければ、—— (五一頁)

⑧ ヨハネの死。

(サ) このアポストロク九十九歳にて逝去し給ふものなり。

サンイシドロの曰く、—— (五一〜五二頁)

以上である。(サ)はこの後、「このアポストロク死去し給ふについで、色々の説あり。——」と続くが、最後まで(黄)とは対応しない。一方、(黄)では、「イングランドの聖王エドムンドウスは、聖ヨハネをたいへん敬愛して、——」以下、最後まで(サ)とは対応しない。

ところで、バレット写本と比較すると、(写本)では、まず右の③・④・⑥・⑦は無い。そして、⑤は「——アポストロ オラシヨシ給ふとともに、俄にその仏殿崩れて、仏像までも残らざるを見て、ゼズキリストを信じ奉る者幾千万といふことなし」までで、「然れども、仏の愚僧なるアリストデモこれを見て、——」以下は無い。結局、対応部は①・②・⑤の前半部・⑧ということになる。(写本)では挿話の大部分を省略しているのである。

本章では対応部(サ)の訳出上の問題点は比較的少ないが、

それでも次のような例が目にとまるのである。例5—1は前掲部の続きである。

ジオアンはアジアで布教していたが、ローマ皇帝ドミシアノによってバトモス島へ流刑にされた。その後のことが次の条である。

5—1 その年ドミシアノ殺害せられたるによつて、悪王の政道をばローマの評定衆よりひるがへすが故に、このアポストロもまた大きな御威勢をもつてもとの所へ帰り給へば、その在所に近づき給ふ折節、数多の人々御迎ひに出て、御主の貴き御名をもつて来たり給ふ御人尊まれ給へと歌ひたるものなり。(四五)

(その年のうちに、皇帝は、その極悪非道のために弑逆され、彼の命令は、元老院によつてすべて取り消された。こうして、不当に流刑の身になっていたヨハネは、たいへんな敬意をもつてふたたびエペソス市に迎えられた。多くの信者たちが駆けよつてきて、「天主の御名においておいでくださったかたに祝福がありますように」と口々に言った。)

1—13556

(サ)の「大きな御威勢をもつて——帰り給へば」と(黄)の「たいへんな敬意をもつて——迎えられた」とでは、表現をめぐつて微妙な違いが出る。(サ)は使徒の尊厳性をまず念頭に置いた訳出態度によるのであろう。このような点はまます見受け

られる。「もとの所」は(サ)の文脈からは、前出部の「その後アジアといふ国へ御弘めのために」の「アジア」ということになるが、(黄)では「エペソス市」となっている。注によると、「小アジアのリュディア地方にあつた古代都市」で、「ローマ帝國アジア州の首都」。

また、(サ)の筆者波線部「御人尊まれ給へ」は、(黄)の「——かたに祝福がありますように」との関係で考えれば、「御人(御主に)尊まれ給へ」の意か。(黄)の「祝福」が「神により恵みを授けられること」の意とすれば、当然「——かたに、(天主の)祝福がありますように」となるはずであるから。しかし、問題が残る。前章の「ジャコブ伝」の最末尾(4—11)に「いつまでもデウス尊まれ給へ」とあつたが、これはどう見ても「——デウス(よ)、(デウスに)尊まれ給へ」の意とは考えられない。現代語の「祝福」の意を基にして、この「尊まれ給へ」を解釈するには問題が残るのである。(サ)では賛美の慣用表現としての意識があるのかどうかということもかかわってくるであろう。

(サ)に次のような例がある。

○ 我等が御主ゼズキリスト万民に尊まれ給ふものなり。

(聖アンデレ・三八頁)

○ デウスも御身のアポストロをもつてかくのごとく尊まれ給ふものなり。(サンチャゴ・六二頁)

これらは共に聖人伝の最末尾から拾つた例である。そして、

共に賛美の慣用表現ではない。前者は「万民に尊まれ給ふ」とある。後者も「(万民に・人々に)尊まれ給ふ」の意であろう。これらの例を基にして前章ジャコブ伝の「いつまでもデウス尊まれ給へ」を考えるなら、当然「——(万民に)尊まれ給へ」となるであろう。結局、本例「御人尊まれ給へ」は現代語の「祝福あれ」という賛美の慣用表現ではなく、「御人、(万民に)尊まれ給へ」と解釈するのが本道と言へることになるのであろう。

5—2 その在所に入り給へば、ドルシアナといふサンジョアンの御弟子なる女人死去せられけるを取り納むるために、棺に入れて昇き行くところに行きあひ給へば、後家弧児どもアポストロを見奉りて、いかにゼズキリストのアポストロ、御異見のごとく我等をはぐくみ給ふドルシアナ死し給ふを送り奉るためにまかり出でたり。——(四五)

(しかし、彼が町なかに入っていくと、彼の女友達で、彼が帰ってくることをころから願っていたドルシアナの死体はがはこばれてきた。そして、いつしよについてきた彼女の両親や寡婦たちや孤児たちは、こう叫んだ。「聖ヨハネさま、ごらんください、これは、ドルシアナの変わりはてた姿です。彼女は、あなたの戒めと教えにしたがつて貧しいわたしたちにいつも食べ物にあたえ、困っているとこゝろを助けてくれました。）」 1—136

(サ)の「御弟子なる女人」は(黄)ではなぜか「女友達」と

なっている。(黄)にはこの点についての注は無い。(サ)の筆者傍線部中の「御異見のごとく」は(黄)では「あなたの戒めと教えにしたがつて」であり、換言すれば「人々に慈悲をほどこせというあなたの教えにしたがつて」ということになるが、(サ)ではそのように読み取れるかどうか。「この後家・孤児たちを扶養せよ」という具体的・現実的な命令に従つて、というように、宗教的ではない意味合いで読み取られても仕方がないのではないだろうか。(ママ)とした「はぐくみ」はローマ字本文では「Fagocuni」(はぐくみ)である。これは翻字本文の誤植かと思つたが、福島氏の前掲書の第一章「サンジョアン伝」では(サ)のこの例を「Fagocuni」という形で掲げ、バレット写本の本章の「Fagocuni」との違いとして指摘している。この点不審。日葡辞書では「はぐくむ」だけである。同じ傍線部中の「ドルシアナ死し給ふを」は「ドルシアナの——」とあつた方が読みやすい。なお、この後の(サ)に「御身のためにはよみがへし給はんことたやすかるべし」という、人々のジョアンに對する言葉がある。この「御身のためには」が「あなたにとつては」と対応するかどうか興味がわいたが、残念ながら(黄)にはこれと対応する文は無かつた。

5-3・(1) 或る時クラタンといふヒイロソホ(哲学者) あまた 数多  
の人を広き所に集め、我等が世を捨つるやうを教ゆべしと  
て、エヘソの人を弟子として二人相具しけるが、——その

時クラタンも、二人の弟子も、そのほかの人々も、これを見てキリテ(誤植)タンになりたるものなり。その中より若き侍二人我が譜代の奴に暇を取らせ、持ちたるほどの宝を貧人に与へ、その身は貧にしてアポストロを慕ひ奉るなり。(四六)

(翌日のこと、クラトンという哲学者が、市場で民衆を呼び集めて、この世を輕蔑しなくてはならぬと説き、それを實地にやつて見せていた。彼は、あらかじめふたり兄弟の富裕な青年に——このときから、クラトンは、キリスト教に改宗した。ふたりの若者も、彼といつしよに改宗し、寶石を売つて、その金を貧しい人びとにわけあたえた。

べつのふたりの貴族の青年がこれを見て、彼らの全財産を売り、その金を貧しい人たちに施し、ヨハネにしたがつた。) 1-137

(サ)の筆者傍線部は、(黄)の「この世」が(サ)の「世」と対応する。(サ)は、「我々がこの世を捨てる方法を——」と言つているのであり、この後、「このごとく世を捨つるぞ」と言つている。(サ)の筆者波線部「エヘソ」(Eheso)はこれが初出だが、(黄)ではすでに前掲部(5-1)に「エペソス市」が出てくる。なお、(サ)の筆者波線部の「その中より」は「クラタンの二人の弟子も、そのほかの人もキリシタンになつたが、その中から」ということで、「若き侍二人」が前出の「二人の弟子」とは別人であることが分かるが、(黄)との比較で読むと、(サ)

のこのところはなんともまぎらわしい。なお、この例は「侍」だが、前出の4—8の例は「侍」である。

5—3 (2) アポストロ、それを取りて帰り、売りたる田畠所従、私宅を望みのままに買へと宣ふなり。然れども天の国をは失ひたると思へ、今は汝達花のごとく栄え、後には長く枯れて居べし。今は福人にて過すとも、後には長く貧人たるべし。今は榮華、歡喜を極むるといふとも、後には長く愁歎すべしと宣ふ折節、(四六—四七)

(すると、ヨハネは、こう言つた。「さあ、出かけていって、あなたたちが売つた財産を買いもどしなさい。しかし、そのかわり天国での報酬は、もうもらえませぬよ。この世で花を咲かせたら、あの世ではしおれるのです。かりそめの世で富裕になつたら、永遠の生命においては物乞いをして歩くのです」そう言つて、富をいましめる説教をはじめ、われわれを富にたいする過度の欲望から遠ざけてくれる六つものものを語つてきかせた。第一に、聖書である。——

こうして聖ヨハネが富を否定する説教をしているとき、

1—139。

(サ)の「今は」と「後には長く」という対照的表現、後者は「後の世では永久に」という意味を持たせているのだから、(黄)の「この世」「あの世」、「かりそめの世」「永遠の生命」という表現と比較すると、やはり(サ)のこの辺の意識が今一つというところであろうか。なお、(黄)は筆者波線部の後で、

六項目にわたる教えを掲げているが、それは(サ)には無い。(サ)は「宣ふ折節」に続き、「夫婦の祝儀をして三十日目に死したる若き者を棺に入れて送り行くを御覧あれば、——」と、若者の葬儀の場面となる。(黄)の場合も六項目の後は、「ひとの死んだ若者が、彼のまえにはこばれてきた。」となる。

5—4 汝よみがへるやうに我がデウスヘオラシヨ(祈禱)を捧げ奉るなり。しかれば我がデウスの御名をもつてよみがへりてかの二人のアツチコとエウゼニオに失ひたるグロウリヤ(栄光)と、求むべき苦しみとを語れと宣へば、(四七)

(すると、若者は死からよみがえつた。ヨハネはその若者に命じて、彼の弟子になつてゐるさつきみのふたりの青年に、あの世でどのような責苦が彼らを待ちかまえているか、また、彼らがどのような至福を失つてしまつたかを話させた。) 1—139

(黄)は会話文ではない。また、若者がよみがえつた後のことである。(サ)の筆者傍線部「かの二人」とは前掲部(5—3の①)でジョセフの弟子となつた「若き侍二人」のこと、(黄)で言へば「べつこのふたりの貴族の青年」のことである。そして、どうしたことか、(サ)ではその二人の名前かと思われる「アツチコ」(Athico)と「エウゼニオ」(Eugenio)が出てくるのである。また、この部分の前の叙述は(サ)の方が詳しい。以上の点から判断すると、原典が違ふのかと考えるをえなくなる。

5—5・(1) アポストロ御談義をもつてエヘソを始めとして、大略アジアを皆キリシタンになし給へども、なほも仏を拜むやからは残り居て、深く歎くが故に、アポストロに対して色々の讒言をなし、アポストロをヂヤナといふ仏の堂に連れ奉り、この仏にサキリヒシヨ(犠牲捧げ物)をなし給へと申しかければ、(四八)

(ヨハネがアジア州全土を説教してまわっていたとき、いつもの神々の崇拜者たちは、民衆を煽動して彼をディアナの神殿に引っぱっていき、偽神に供物をささげさせようとした。) 1—140

ここから話の内容が変わる。(サ)では「エヘソを始めとして」とあるが、だいたい今までの話の舞台はエペソス市なのであり、(黄)では最初にそれをこわっている(5—1参照)。(サ)の筆者傍線部「深く歎くが故に」は形の上では(黄)との対応が一応認められるが、内容的にはどうか。(サ)は「アポストロをたいそう恨み、心痛したが故に」のような意となるだろう。つまり、(黄)の「民衆を煽動して」の意のような「人々に訴えたが故に」という意を読み取ることはできないであろう。この続きは次のとおり。

5—5・(2) アポストロかの悪人等に二つの中にいづれをなりとも定めよ、或いは汝達の仏を頼みて、我等がゼズキリストのエケレジャ(教会)を崩す力あるにおいては、我もま

たその仏を拜むべし。もし又我ゼズキリストの御名の力をもつて汝達の仏像、殿堂を崩すにおいては、我等がゼズキリストを信ぜよと宣へば、御敵等も大略この儀もつともなりと同心して、その堂を出づるところに、アポストロオラシヨし給ふとともに、俄にその仏殿崩れて、仏像までも残らざるを見て、ゼズキリストを信じ奉る者幾千万といふことなし。(四八)

(しかし、ヨハネは、彼らにつきのような提案をした。「双方がそれぞれの神に呼びかけることにしましょう。あなたたちは、ディアナにキリストの教会を破壊するようにたのみなさい。ディアナがそれを実現したなら、わたしは、ディアナに供儀をしましょう。わたしは、キリストさまにディアナの神殿を破壊してくださるようお願いしましょう。キリストさまがそうしてくださったら、あなたがたは、キリストを信仰しなければなりませんよ」と。民衆は、この提案をたいへんおもしろいとおもひ、みんな神殿を出ていった。ヨハネは、天主におん力をおしめしめくださるやうにと祈った。すると、神殿は倒壊し、いつもの女神の偶像は、こなごなにくだけた。) 1—140

(サ)の「二つの中に——」は(黄)の「双方がそれぞれの神に——」と、同意を求めるための呼びかけという形の上では対応が認められるが、内容的にはどうか。「二つ」は後続部の提案を指し、その提案の主旨は(黄)と同じなのであるが。また、

(サ)の筆者波線部中の「御敵」は「ゼズキリストの御敵」という意識での敬語表現(その二)の例24-5参照。(黄)では「民衆」である。なお、(サ)の末尾の筆者波線部は(黄)とは対応しない。

5-6 同じくイストリヤ エケレジャスタカに、或る時エヘソにて風呂に入り給へば、セリントといふエレゼ異端者風呂の中に居ければ、その風呂の口までさしのぞき給へども、うちには入り給はずして、上り給ひ御供に参りたる人にいざただ帰るべし、故を如何にと言ふに、まことの敵と、悪人との居所に於て、風呂崩れて上に落ちば、損たるべしと宣ひて、帰り給ふなり。これ悪しき者共には御同居もし給ふまじきとの儀なり。(五一)

(おなじ)『教会史』(第四巻第一四章)にもあるし、「ヨハネの第二の手紙」の、「この教えをもたずにあなたがたのところに来る者があれば」という語句についての注解書の説明にも書かれているように、ヨハネは、あるとき、エペソスの町の浴場に行き、そこで異端者のケリントスに会った。彼は、すばやく浴場からとびだして、こう叫んだ。「浴場が頭のうえに倒れてこないうちに逃げなければならぬ。なにしろ、真理の敵ケリントスが入浴していたから」 1-1

4223

この挿話の筆者波線部は既出例(一)で、「まことの敵」

と「真理の敵」との対応が興味深い。筆者波線部で(サ)は『教会史』を典拠として示すが、(黄)ではそれに『注解書』が加わる。「同じく」と「おなじ」との対応も興味深い。この、前出部の『教会史』からの話は次のとおり。

サンクレメンテ パパ エケレジャのイストリヤに見えたるごとく、徳となるおもしろきことわりを書き置き給ふなり。サンジョアン パソモスより帰り給ふ時、そのあたりの在々所々より寺々をも 又は新しきキリシタンをも御覽ぜらるるやうにと頼み申さるるなり。一在所に入り給ひ、ミサ 法事を行はせられ、その所の者にいかにも怜利なる若き者を御覽ぜられ、かれを召し寄せられ、先刻ビスポになし給ふ人にかの者を預けさせられ、たしかにこの者の上を心掛け給へと、人々の前にて渡し給ふなり。(四九)

(エウセビオスの『教会史』(第三巻第三章)にもあるように、聖クレメンスは、つぎのような物語を書きとめていた。使徒ヨハネは、かつてひとりになりたいへん美しいが粗野な少年を回心させ、貴重な宝物だと言つて少年をある司教の監督にゆだねた。——) 15141

(サ)の筆者波線部は「サンクレメンテ パパ——書き置き給ふなり」となる文。「エケレジャのイストリヤ」は『教会史』のことであるが、(黄)では「エウセビオスの」とある。(サ)の方もエウセビオスのと考えておいてよいのであるが、この「エウセビオス」は(サ)では、たとえば「2 聖パウロ」に、

エウセビヨといふ人も細かにその様体を載せられたり。

その経には、ネロ帝王アポストロの奏聞を直に叵聞あつて誤りなしとて、赦免し給ひ、——(一九)

のように出てくる(ただし(黄)との対応は無い)。「エウセビヨの経」は「教会史」かどうか分からないが、「13 聖イグナチオ」の表題にも、

アンチオキヤのビスポ サントイグナチオの御作業、並びにそのマルチリヨの様子(つづ)。これサンエウセビヨ ビスポと、サンアントニノの記録なり。(一九二)

と出てくる。この場合は、(黄)の本文中にも、エウセビオスの「教会史」がでてくる。「エウセビオス」は(黄)によると、パルステイナのサマリア地方の、地中海にのぞむ都市カイサリアの司教であつた人(二六三頃—三三九)。

さて、(サ)の筆者波線部は(黄)との対応が無い。この辺りも、原典の違いを示唆するところと言えようか。「パソモス」はローマ字本文「Palmos」で、ジョアンが流された島の名(本節導入部参照である。本節冒頭部に出る島の名としての翻字は「パトモス」であつたが、ローマ字本文ではやはり「Palmos」で、両者に違いは無い。

この挿話の「若き者」はその後、悪党のかしらとなるが、ジョアンによって改心させられる。改心の場面に次のようなところがある。

アポストロ御誓文をもつて汝をデウスより許し給ふやう

に申し受くべしと、御約束し給ひ、その盜賊の足もとにひれ伏し給ひ、隠すところの右の手を吸給ふなり。(五一)

(すると、ヨハネは、少年の前にひざまずいて、彼の手に、まるでその手がすでに贖罪によつて洗い清められているかのように接吻した。) 1142

筆者傍線部は前節の4—7参照。

ジョアンの死去の場面は次のとおり。

5—7・(1) このアポストロ九十九歳にして逝去し給ふものなり。サンイシドロの曰く、御バシジョンの後六十七年の御存命なりと。御主ゼキリスト御弟子とともにこのアポストロに見えさせられ、いかに我が親しき知音、我に來り、汝の兄弟ともに我が飯台に坐すべしと宣ふなり。すなはちサンジョアン立あがり給へば、御主宣はく、今日より五日目はドミンゴ(主の日、日曜日)に当りぬれば、その時來れと宣へば、その日になりて、万民サンジョアンに対し奉りて人々の営み造りたるエケレジャ(教会)へ相集るなり。(五一—)

(聖ヨハネが九十九歳のとき、イシドルスの記述によれば、主のご受難後六十七年目のことだが、主は、弟子たちとともにヨハネのまえにあらわれて、こう言われた。「選ばれた者よ、さあ、わたしのもとに來るがよい。あなたがわたしの食卓で兄弟たちといっしょに食事をする事ができ

る日が来たのである」ヨハネは、立ちあがって、キリストのみもとに行こうとした。しかし、主は、「あなたは、日曜日にわたしのもとに来ることになっている」と言われた。日曜日になって、彼をたたえて建てられた教会にすべての人びとが集まった。 11144

よく対応していると言える。最初の筆者波線部からガイシドルスからの引用内容。(サ)の「我が親しき知音」は(黄)では「選ばれた者」である。「我が飯台」と「わたしの食卓」との対応にも注目してよいであろう。(サ)の筆者傍線部は、(黄)のような表現になると、「サンジョアンに對し奉りて人々の営み造りたるエクレジヤへ万民相集るなり」となる。この方が読みやすい。

5-7・(2) 然れば万民に長く末期の御談議をさせられ、ヒイデス(信仰)に届き、ヘルオル(熱情)をもつてデウスのマシダメント(掟、戒律)を保てとすすめ給ひてより、アルタル(祭壇)のそばに四方なる穴を掘らせ、その掘りたる土をばエクレジヤより外に捨てさせ、その穴に入り給ひ、御手をひろげ給ひて、いかに御主ゼキリスト、我を御振舞のために召し、眞き料理をくださったれんと申し召すことをかたじけなく存じて参るなり。我御身に力の及ぶほど、添ひ届け奉りたきと願ひ奉ることをば知らしめすと、申し終り給ふとともに、(五)

(彼は、一番どりが鳴くとともに説教をはじめて、たえず信仰をもちつづけ、天王のご命令を愛さなくてはならない、といましめた。説教がすむと、祭壇のよこに四角い穴を掘らせ、土を教会のそとにはこびださせた。そして、穴のなかにはいり、両手を神にさしのべて、こう言った。「主イエス・キリストさま、ごらんください。わたしは、みもとにまいります。あなたの食卓におまねきくださったことに感謝いたします。と申しますのは、わたしがみもとにまいりたいところから願っていたことをご存じていてくださったからです」彼がこのように祈りおわると、) 11144

(サ)の「アルタルのそばに四方なる穴を掘らせ」は(黄)の「祭壇のよこに四角い穴を掘らせ」ときちんと対応している。本論「その一」の「はじめに」で述べたことだが、福島邦道氏は、カックストン訳本にはこの「四方なる」に対応する語が無いと述べておられる(ドイツ語訳本にはあると、その語を指摘される。また、「og」は「og」でなければならぬと述べられる)。この点でも、人文書院の(黄)を用いる方が有利であると言えないであろうか。

また、(サ)の筆者波線部はいささか宙に浮いたような内容だが、(黄)との対応が、その主旨の理解を助けてくれる。

なお、「御談議」は、本章導入部中の「サンジョアンは御談議をも止め給はぬ」、また、5-5・(1)の「アポストロ御談議をもつて」の例は「御談議」である。

5-7・(3) アポストロの御上(ごんじょう)に大光明輝(かみょう)きくたり、誰も見奉ること叶はずして、その光の消ゆるとともに、その穴のうちにも残らず、ただいかに細かなるまきこの湧き出づるのみなり。今もそのまきごは湧くとぞ聞ゆ。サンイエロニモの宣ふは、骨肉(こつにく)の邪(よこしま)まる望みにたやすく勝ち給ふごとく、死苦をも従へ給ひ、御自由に終り給ふなりとぞ。  
(五二)

(彼のまわりに大きな光があらわれ、みんな眼がくらんで、彼の姿が見えなくなつた。光が消えたとき、穴に天のパン(マナのこと、——)があふれていた。それは、こんにちでも湧きつづけている。泉のこまやかな砂のように、穴の底に波打つているのである。)

1-144

これは「3 聖アンデレ」の3-14例と似ている。すなわち、「アポストロの御棺(みかぶ)よりは小麦(こむぎ)の粉(こな)のごとくに見えたるマンナ」と、香ばしき油湧出すと人々沙汰せり。——」と同趣の内容である。この「マンナ」は「天の糧、天食」すなわち「天のパン」のことであるが、(サ)の筆者傍線部では「ただいかにも細かなるまきこの湧き出づるのみなり」とあるだけで、(黄)の「天のパンがあふれていた」との対応は無い。(黄)の「泉のこまやかな砂のように」が、(サ)では「こまやかな砂(そのもの)が」となっているわけである。訳者は、「聖アンデレ」の章も本章も洞院ヴィイセンテ。

なお、(サ)の筆者傍線部「サンイエロニモの宣ふは」以下の

内容は(黄)には無い。「——まきごは湧くとぞ聞ゆ」までがサンイエロからの引用なのであつて、その点は(黄)も同じである。

以上で本章の対応部は終る。

## 注

(1) 大塚光信氏のこの二編は氏の『抄物きりしたん資料私注』(清文堂・一九九六年四月)に収録されている。

(2) チースリク師の解説の「5 原典」(二七頁)に次のようである。『サントスの御作業』の原典は、各聖人伝の冒頭に銘記されている。とは言つても、エウセビオス、メタフラステスなどの著書はすべて日本にあつたわけではなく、すでにサトウ氏 Ernest Satow が指摘したように、そのほとんどはスリウスやアントニノの書に収録されているので、そこから取り出されたであろう。要するに、「サントスの御作業」の出典は、リボマニ、アントニノ、ルイス・デ・クラナダの三つと見ても差し支えない。本論「その一」参照。

(3) 初出は「ヴィイセンテ訳聖ヨハネ伝本文考」(実践女子大学紀要) 21・昭和五四年三月。

(4) 注(2)のチースリク師の解説の「(10) 聖アントニノ」(三三頁)中に、「なお、エウセビオス、ヒエロニムス、ペドロ・デ・ナタリフスを基にする伝説も、アントニノの書から引用されている」とある。

(5) 「キリシタン研究」第七輯の一〇一頁「洗者聖ヨハネ誕生の祝日ルカ聖福音書第一章[57-68]」に、「御人数を労はり、助け給ふドミネ イスラエルのデウス貴まれ給へと申し述べらるるなり」という例がある。これは68節に当たる。それを福音書で見ると、「主なるイスラエルの神は、ほむべきかな。神はその民を顧みてこれをあがなす」(「Blessed be the Lord God of Israel, for he has visited and redeemed his people」)とある。